



大決壊!!

妹は甘えんぼ

目次

1章目 おはようはおむつにエプロン

2章目 お兄ちゃんにおはようご奉仕！

3章目 学校で秘密の角オナ！

4章目 跳び箱で大決壊！

5章目 下校中にうんちおもらし……

エピローグ おむつ妹を看病。

4章目 跳び箱で大決壊！

(もう、ごまかせない……)

そのことを悟った瞬間、絵馬の全身からフッと力が抜ける。心が完全に折れてしまったのだ。

メリメリメリッ、
ぷすっ、ぷすすっ！

紺色のブルマが少しずつ、だが確実に悪臭を放ちながら膨らんでいく。

『絵馬キチ～、早くどいてくれないと、次が詰まってるよ～』
『足、くじいたの？』

なにも知らないクラスメートたちが声をかけてくれるけど、絵馬は動くことができない。

だけど、このままでいるわけにはいかないのだ。

このままでいても、硬質便に肛門をこじ開けられ、2週間も封印されていたものを放ってしまう。

それならば、潔く諦めた方がいい。それはわかっている。

だけど、絵馬はどうしても跳び箱の上から動くことができなかった。

絵馬が選んだのは……。

ゆっくりとした処刑だった。

それは思春期の少女として――。



(うう……この場から消えていなくなれたら良いのに……っ)

メキメキメキ！

ブボッ、ブボボ……もわ……。

小柄な絵馬の身体……そのお尻が少しずつ盛り上がっていく。
紺色ブルマから、ごまかしようのない悪臭が漂いだした。

「い、いやぁ……っ」

漏らし続ける少女は、小動物のように背筋を丸めるも、大腸の圧力はより強さを増していくようだった。

ブルマをパイナップルのように盛り上げていき、やがてお尻を完全に膨らませきったうんちは、会陰を伝っておまたの方にまで押し寄せてくる。

(お兄ちゃんの精液、ついてるのに……、汚しちゃうなんて……お兄ちゃんを汚しちゃうなんて……ううっ、ごめん、なさい……)

「ごめん、なさい……」

小さく呟いた瞬間、カチカチに固まったうんちが秘筋へと食い込んできて、甘美な電流を走らせる。

漏らしているというのに、絵馬は性的に興奮していたのだ。

勃起したクリトリスは、思春期の少女の意思とは関係無しに快楽を呼び起こす。

「あっ、ひい！」

ミチミチミチミチミチ！
モリモリモリモリモリモリモリ！

絵馬の引き攣った嬌声が体育館に響き渡る。
本人の意思に反してお腹に力が入って、硬質便が一気に放たれる。

限界を超えて拡張された肛門は、為す術なく極太の硬質便を押し出していた。

『絵馬キチ、大丈夫……？』
『やっぱり足、くじいたの？』

いつしか、体育館は静寂に包まれている。
すべての女子——絵馬のクラスと、隣のクラス——の視線が、絵馬に集中しているのを感じる。

俯いていても、嫌というほど分かってしまう。

後ろに並んでいたクラスメートたちが心配そうに近づいてくる足音も聞こえる。

(っっっいやぁ……っ。いま、近づいてこられたら……っ)

メキメキメキメキメキメキ！
ぶすすっ、ぶすすっ、ぶす……。

今すぐにでも逃げたい。

だけど跳び箱から降りる力さえも絵馬には残されてはいない。

前も後ろも、限界までモコモコに膨らみきったブルマー——。

次なるうんちが広がっていく空間は……それは、絵馬にはあまりにも残酷な現実となって訪れることになる。

『え、絵馬キチ……う、うそ……』

背後からクラスメートに呼びかけられるも、絵馬には振り返る勇気も、力も残されていない。

ただ、ブルマは無情にも盛り上がり続け……、溢れ出してきたのは、足口からだった。

「お願い、見ないで……」

メリメリメリ……ッ。
ぶぼぼっ、もわわ……っ。

2週間分の硬質便は、ブルマという極小の布切れに収まるものではなかった。

カチカチに固まったうんちはブルマとショーツに形を変えられて、一番脆い場所……つまり足回りのゴムをこじ開けて溢れ出してきたのだ。

「おっ、おかしなァ……っ、お尻に、力、入らなくて……うっ、ううっ、勝手に、出てきちゃ……ううっ」

ぼとっ、ぼとっ、ぼと……。

足口から溢れ出してきた硬質便は重力に従って落ち、板張りの床に積み上がっていく。

茶色い塊は、誰しものが嗅いだことがある香りだ。しかし、それは日常的な体育館では絶対に漂わない香り。

そのことに、その場にいる女子生徒たちは言葉を失い、絵馬を見つめることしかできなかった。

「お願い……っ、見ないで……。こんなあたし、お願いだから見ないで……。もう、お尻、止まらなくなってるよぉ……」

ミチミチミチ……。
ぷっ、ぷううううう……っ。

静まりかえった体育館に、ソプラノよりも高い放屁音が響き渡る。

しかしそのおならを誰も笑わない。いや、笑うことができなかった。

「お尻、痛い、よぉ……っ」

メキメキメキ……ッ、
もこ、もこり、もこり……。

絵馬のプリッとしたお尻を包み込んでいた紺色ブルマは、もはやその輪郭を留めていない。

ドリアンのように大きく、そしてイガイガと熟そうとしている。漂っているのは、どんなドリアンであっても敵わぬほどの悪臭……。それは、少女の体内で2週間をかけて発酵したものの腐敗臭だった。

「うう……っ、嗅がないで……。お願い、だよぉ……っ。見ないで……。嗅がないで……」

ぷっ、ふううう〜〜〜。
おすっ、もわわ〜〜っ。

悪臭を放つ放屁。

人の直腸の体温は平均して 37.5℃といわれている。

これは真夏の気温よりも暑い。

そんな体内で、2週間ものあいだ腐り続けていたモノ……。

ご飯に味噌汁、それにサラダに肉、イチゴにヨーグルトも食べた。

料理が好きな絵馬は、和・洋・中なんでも作ることができる。

腐敗臭にややニンニクの匂いが混じっているのは、たぶん一週間前に作ったギョーザのせいだろう。

「あっ、あああっ、だ、だめえ……!!」

小動物のように丸められている背筋がピクリと震える。

その直後だった。

にゅるるるるるるるる！
ブリッ！ ブリブリブリ！

今までの硬質便とは明らかに音質の違う、もっと水っぽい音が鳴り響いた。

ただでさえドリアンのように膨らんでいるブルマが、

ポフッ！

鈍い音とともに膨らむと、更なる悪臭を撒き散らす。

「あっ！ あっ！ あっ！ おひりっ、勝手に開いて……うっ、あっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ……っ」

ブリブリブリ！

ブボボッ！ ブボボボボ！！

大腸に封じられていた期間が短いうんちは、まだ水分が吸収され切れずに柔らかい。

水っぽい音とともに直腸を一気に滑り出し、ショーツの中へと放たれていく。

「んおっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ……っ」

絵馬は舌を突き出して、下品な喘ぎ声を漏らしことしかできなかった。

柔らかいうんちがお尻に、おまたに食い込んでくると少女の敏感な宝石を容赦無く蹂躪していく。

「おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ……っ！ いっ、ひっ、ひいっ」

ブボボボボボボボボッ！

ヴリッ！ ヴリリリリリリ！

既にパンパンに膨らんだブルマが更に膨らんでいき――。
ついに悲劇は訪れる。

にゅるるるるっ。

ベチョッ、べちょちょっ。

静寂に包まれた体育館……。
その静寂に、

しゅiiiiiiiiiiiiiiiiiiii……。

絵馬のモリモリに膨らみきったブルマから、くぐもった水音が聞こえてくると、おしっこが滲みだしてくる。

股間の部分から滲み出してきたおしっこは、軟便の層で濾過されて茶色く濁っていた。

体育館の密閉された熱気が、少女の腐敗臭で蒸れていく――。

☆

その後、絵馬はクラスメートの保健係の女子に肩を貸してもらって、保健室に連れて行かれることになった。

本当はトイレに行きたかったけど、体調が悪い絵馬を一人にすることはできないらしい。

だがそれは保健室で、保健の先生がみているところでおもらしの『後始末』をしなければならぬということの意味する。

カーテンで遮られたところで『後始末』をすることになったけど、それでも匂いまでも隠すことはできない。

『それじゃあ、一人でできそう？』

「はい……大丈夫です」

保健の女医さんの心配そうな視線が痛い。

絵馬は小さく頷くと、保健室のカーテンで区切られたスペース……元々ベッドが置いてあるけど絵馬のためにどかさされた……で、『後始末』をすることになった。

(新聞紙、ちゃんと広げておかないと……)

リノリウムの床に、用意してくれた新聞紙を広げていく。
なにしろ絵馬の穿いているショーツの中には2週間分のうんちが詰まっていて、ブルマはボコボコに膨らんでいるのだ。
脱ごうとすれば、便塊が落ちてしまうに違いなかった。

「はぁ……もう最悪だよ……」

みんなの前でうんちを漏らしたばかりか、なにもできずに泣くことしかできなかった。

そういえば、うんちをおもらししてしまった跳び箱はどうなったのだろうか？

使えるようになればいいけど……。

そんなことを考えながらも床に隙間なく新聞紙を広げていると、

ギュルルルル……。

大人しくなっていたお腹が再び痛くなってきてしまう。

全部出したと思ったのに、まだお腹に残っていたようだ。

「どうしよう……。またお腹痛くなってきちゃった」

トイレに行かせてもらったほうがいいだろうか？

いや、今の絵馬は、うんちで汚れたブルマを穿いているのだ。

授業中の廊下とはいえ、誰に会うかも分からない。

それにトイレに向かっている途中で力尽きてしまうことも考えられるのだ。

それならば……。

「ううっ、ちょっとだけだから……、大丈夫、だよね……？」

もうショーツもブルマも汚れきっているのだ。
それならば我慢するだけ無駄じゃないか……。

(ごめんなさい……、楽に、なっちゃうの)

白のカーテンの向こう側にいる保健の先生に、心の中で謝っておく。

保健室でうんちを漏らし始めるだなんて。
しかも、自分の意思で。

(んっ、ううう……っ)

絵馬は新聞紙の上にしゃがみこむ。

それはまるで和式の便座で『する』ときのように。

ショーツとブルマは穿いたままだ。

もう既にモコモコに膨らみきっているのだ。これ以上漏らしても大差ないし、なによりもショーツを脱いでうんちをする勇気が、絵馬にはどうしても湧いてこなかった。

「んっ、ふっ、ふうう……！」

メリメリメリ……ムリュっ。

お腹に力を入れていくと、柔らかうんちが直腸から溢れ出してくる感触。

ブルマのお尻の部分がうっすらと盛り上がっていき、股間のほうまでモリモリと盛り上がっていく。

「んっ、ふうう……。あっ、あああ……。っ」

むりゅむりゅむりゅ……。

ぶぽっ、ぶぽぽ……。っ。

しゅいはいい……。っ。

「あっ！ あっ！ あっ！ あっ！」

しゅいはいい……。っ。

——おしっこは、ダメ……。っ！

しかし一度出てきてしまったおしっこは止まってはくれない。
やがてブルマから滲み出してきたのは、うんちで濾過されて茶色く変色したおしっこ。それが新聞紙に染みこんで広がっていく。
それだけじゃない。

むにゅっ、にゆるにゆるにゆる……。っ。

べちょっ、べちょべちょちょ！

「ああ……。い、やあ……。っ！」

ブルマの足口から、柔らかうんちがひり出されてくると、新聞紙に潰れて積み重なっていく。

ちょっとだけだと思っていたのに……。

どうやら絵馬のお腹にはまだうんちがかなり残っていたようだ。

ニュルルルル……。っ。

ねちょ、ねちょねちょ……。っ。

「うう、止まらない、よお……。っ」

絵馬の意思とは無関係に、ブルマの足口からは大量のうんちがひり出され……、新聞紙の上には形の悪いチョコレートソフトクリームのできあがった。

「早く止めたいのに……うあぁっ、止まらない……っ。お願いだから早く終わって……！」

むりゅむりゅむりゅ……。

音が出ないように、ゆっくりとうんちを出している、そのときだった。

ガラガラと保健室のドアがけたたましく開かれると、

「大丈夫か!? 絵馬！」

カーテン越しに聞こえる声は、聞き間違えるはずがない。

お兄ちゃんが駆けつけてきてくれたのだ。

だけど、今はちょっと……と、というか、できればお兄ちゃんとは会いたくはない。

『あら、天川さんのお兄ちゃん？ 妹さんならそのカーテンのなかだけど』

「わかりましたっ」

『あ、でも今はまだやめたほうが……』

保健の先生が止める声も、兄の足音が近づいてくると、シャッ、一気にカーテンが開かれる。

なかにいた絵馬は――

ブリッ、ブリリッ！
にゅるにゅるにゅるるる！

和式トイレにしゃがみこんだときのようにうんちを漏らし、ブルマをモコモコに膨らませることしかできなかった。

「あ、あの……ちよっ、待ってお兄ちゃん、こ、これは……っ」

慌てて立ち上がろうとするも、うんちがパンパンに詰まっているショーツとブルマを穿いていて腰に上手く力が入らずに、

ベチョ——ッ！

「んっおおお！」

絵馬は新聞紙の上で尻餅をついてしまう。

ショーツの中でうんちが潰れ、お尻に、そしておまたに食い込んでくる。

勃起したクリトリスから電流が発せられると、

キュン！ キュン！ キュウン！
ぶぼっぶぼぼぼぼぼぼ！

「あっ、あひっ、あっへえ……！」

絵馬は尻餅をついて、Mの字に脚を開いて達してしまう。

キュン、キュン！ 赤らんだ内股が痙攣するたびに、ブリブリとうんちが溢れ出し、足口からひり出されていった。

(お兄ちゃんの前なのに……！　こんなに恥ずかしいところみられちゃうなんて……！)

キュン！　キュウウ！
ぶり、ヴリヴリヴリヴリ！

舌を突き出し、脚を開き、うんちを漏らし続け――、
絵馬は、兄に見られながら絶頂の泥沼へと沈み込んでいった。

☆

「……綺麗にしてやるから、ジッとしてるんだぞ」
「う、うん……」

絵馬の大決壊が終わったのは、兄に見られながら5分ほどうんちを漏らしてからのことだった。

絵馬は兄によって上履きと靴下を脱がされると、ゆっくりとブルマを下ろされていく。

ぬっちゃあああ～～～。

「お願い、見ないで……」

絵馬が呟いたのも無理はない。

なにしろピンクのしましまショーツだった布切れのなかには、汚泥が放たれて元の色を見つけるのが困難なほどになっていたのだ。

前のほうも、後ろのほうも茶色いもので覆い尽くされていて、2

週間ものの腐敗臭が満ちあふれる。

べちょ、

「あっ、あううっ」

ショーツの上に落ちたのは、絵馬のお尻やおまたにこびりついていたうんちだった。

産毛さえも生えていないおまたは、赤ん坊のようにうんち塗れになっていてヒクヒクと痙攣している。

「もう全部出たのか？」

「うん……。スッキリしちゃったの……」

「そっか。それなら綺麗にしてやるからジッとしてるんだぞ」

「いいよっ、自分でやるから……」

「遠慮するなって。ほら、まずはお尻とおまた、拭くからな」

「う、うう～～～」

絵馬は体操服も汚さないように脱いで、ブラジャーだけの姿になる。

新聞紙の上で立って、兄に拭かれるのを待つ。

「よーし、拭き拭きしてやる」

兄はトイレットペーパーを手にとると、手際よくお尻とおまたを拭き拭きしてくれる。

おまたを拭く手つきが赤ちゃんのものと変わらないのは、ちょっと複雑な気分がするけど。

(ああ、でもお兄ちゃんにおまた触られちゃってるんだ)

そう思ったら、膝がカクカクと震えておまたが熱く濡れてきてしまう。

その蜜も、兄は気づいていないのか手際よく拭き取ってくれた。



「よし、綺麗になったぞ」

「ありがとう、なの……」

「もう今日は一緒に帰るか？」

「うん……。もう、授業終わっちゃってるし……」

もう保健室のカーテンの外では、どこか落ち着きのない放課後のざわめきが聞こえてきている。

お兄ちゃんに充ててもらった新しい紙おむつの上から制服を着ていく。

「おむつ、はみ出してないかな」

「大丈夫。お尻が膨らんでセクシーで可愛いぞ」

「んもう、お兄ちゃんのエッチ！」

そんなことを考えながらも、絵馬は明日の朝はどうやってお兄ちゃんから精液を貰おうかと考えている。

(ショーツも良いけど……。ブラの裏側とか、どうかな。乳首、チリチリして痒くなっちゃうかも知れないけど……)

じゅわり……。

おむつの中が早くも熱く蒸れてきて、絵馬はカーテンを出たところで立ち止まってしまう。

「どうした、絵馬。……まだ身体の調子が悪いのか？」

「うん……。膝小僧、ちょっとだけ震えてる」

「それじゃ、腕貸してやる」

「……うん！」

兄の腕にしがみつくと、むぎゅっと大きく膨らんだ乳房が兄の二の腕を包み込む。

兄の固く逞しい腕の感触に、絵馬はおむつのなかを熱く蒸らし…、スカートの裾を踊らせると、少女の甘いフローラルの香りを振りまくのだった。

☆

「さて、今日の最後の一仕事、済ませておくか」

ときは日付が変わろうかという夜中。

浩喜が呟いたのは、絵馬におむつを充ててあげて寝かしつけた後のことだった。

絵馬はかなり疲れていたようだ。

今日は学校でうんちを漏らしてしまったのだから無理もないことだろうけど。

そして浩喜の今日の最後の一仕事は、正にそのことに関するものだった。

兄として浩喜ができること。

それは――。

「ショーツとブルマ、綺麗に洗っておかないと、な」

ピンクと白のしましまショーツが色落ちしないようにと酸素系漂白剤を薄めてバケツに張る。

そのバケツを持って洗面所からトイレへ移動。

妹がうんちをおもらししてしまったショーツを洗うときは、いつも兄はトイレで洗うことにしていた。

「絵馬、便秘気味だからな……。うんち、水道管に詰まらせちゃったら大変だし……」

カバンの中から取り出したのは、キツく口を結んでいる白のビニル袋。

ただ、中身が透けて茶色いモノが透けて見えている。

「綺麗にしてやるからなー」

兄は意を決すると、ビニル袋の結び紐を解いていく。
溢れ出てきたのは――、
圧倒的な臭気だった。

もわ……。っ。

茶色い腐敗臭がビニル袋から立ち昇ってくると、狭いトイレの個室に満ちあふれる。

万が一、絵馬が目覚ましてトイレに起きてきた場合に備えて、トイレのドアの鍵を締めておく。

「絵馬……。酷い便秘だったんだな……」

大量の便塊、そして濃密な腐敗臭。

それは長いあいだ妹の身体に便塊が溜まっていたことを意味する。

兄はビニル袋から、紺色の小さなぼろ切れを取り出す。

それはかつて……。半日前まではブルマだったものだ。

しかし今となっては汚泥に塗れて、見るも無様な姿に穢されていた。

「絵馬……すまん」

ここにはいない妹に謝る。

ブルマとショーツを綺麗にするには、これから妹の恥ずかしいところを見なければならぬのだ。

それは絵馬にとっては、おまたを見られるよりもずっと恥ずかしいことに違いない。

……おまたなら、毎朝のおむつ交換で見ている。

だからブルマとショーツの内側に広がる光景は、絵馬にとっては恥部よりも恥ずかしい恥部なのだ。

「うっ、うおお……。こ、これは……」

ムワ……。ツ。

ショーツとブルマを広げ、まず目に飛び込んできたのは明るい茶色の柔らかうんちだった。

それはまるで茶色いマグマのようだった。

「小さな身体に、いっぱい溜まってたんだなあ……」

女の子というのは体調によっては便秘になりやすいものだと聞いたことがあるが――。

明るい茶色の柔らかうんちの下にあったのは、焦げ茶色の固めの便塊だった。

絵馬の腸内でカチカチに固まっていたであろううんちは、ショーツとブルマに押し潰されて前のほうへと広がっている。

「まずはうんちを落とさないとな……」

ぼちゃっ。

兄として、男として信じられないほどの巨大な便塊を水洗トイレへと落とす。

形があるものはショーツをひっくり返せば簡単に落ちてくれるけど、柔らかうんちはそうそう簡単にはいかない。

ショーツにこびりついてしまっている。

「お腹、痛かったんだな……」

ブルマのなかからショーツだけを取り出す。

白とピンクのしましまショーツは、元の色だったところが皆無なほどに蹂躪され尽くしていた。

ねちゃ、ねちゃ、
ネチャネチャ……。

ショーツにこびりついた妹の柔らかうんちを丹念に洗っていく。

シメジやワカメ、それにゴボウの食物繊維だろうか？

茶色い軟便のなかには二週間くらいまえに食べたものの残骸が混じり合っている。

ずっと妹は張ってるお腹を我慢していたのだろう。

いつもおむつを交換しているのに、気づいてやることができなかった。

「今度は下剤……は怖がりそうだから……お腹のマッサージ、手伝ってあげるかなあ」

ねちょ、ねちゃ、ぐちゅぐちゅ。
ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅちゅっ。

酸素系漂白剤を薄めた水に浸しながら、丁寧に染みを取っていく。

その甲斐あって、しましまシャツはなんとか元の色に戻ってくれた。

あとは洗濯機に入れて回せば元通りになってくれることだろう。

「ブルマもゴシゴシ、だな」

幸いなことにブルマの繊維は汚れが染みにくいようになっている。簡単に水洗いするだけでうんちが落ちてくれる。これも洗濯機に放り込んでおく。

「さて、俺も寝るか」

もしも深夜の洗濯のことを知ったら、きっと絵馬は赤面して気絶するに違いない。

だから綺麗になったシャツとブルマは、それとなく妹のタンスの中に戻しておいてやればいいのだ。

浩喜は、こうしてずっと妹のことを見守ってきたのだ。

ここまで読んでくれてありがとうございました！
体験版はここまでです！

続きは製品版でお楽しみ頂けたら嬉しいです！